

水内俊雄 編

シリーズ人文地理学 8 『歴史と空間』

朝倉書店 2006年10月

A5版 196頁 本体3,800円＋税

「はしがき」で編者水内俊雄氏は以下のように述べている。それは「伝統的な歴史地理学そのものが揺るぎつつあるような事態が1990年代に生じるようになったと言ってよかろう。」とか、「秘かな歴史地理学の脱構築のたくらみをこめていること」云々、そして「本巻では古い皮袋なる歴史地理学というタームをメインのタイトルからはずして、「歴史と空間」とした、」ともある。また、「京都大学出身者たちによる歴史地理学の確立は、ドイツの景観地理学の影響もあってか、非常に特異な出自を有したのではなからうか、」などと、伝統的な歴史地理学に対する聊か挑発的な意見を表明している。

つづけて各章についてのコメントが付けられている。第1章(千田論文)については、「その地理的想像力が政治に翻弄されたときの怖さもあわせて批判する姿勢をもう少し地理学者が共有する機微があってもよかろう。」と、地理的想像力の政治への利用の怖さへの、より積極的な表明の必要性も指摘している。第2章(金田論文)についても、「景観復原を至上の分析手法としてきた地理学のもつ限界をどのように乗り越えるかの方法論として学ぶべき章であろう」という感想が述べられている。正統派歴史地理学の代表、景観復原を至上の分析手法としてきたその限界克服方法が示されているという高い評価が下される。第3章(溝口論文)については、「問題はこうした歴史的資料を読みこなす技量を、地理学の教育体系で教えることができるかであろう。」と、否定的な発言がなされているが、溝口氏が取り上げている技量は現代の人文地理学の手法の歴史地理学への適用である。第4章(三好論文)については、「1980年代中ごろの葛川絵図研究会の活動のインパクトは大きく、絵図の表象まで踏み込み、学界に刺激を与えてくれた、そうした流れを今回の講座では汲み取れていない。」と批判している。編者の意図が執筆者に伝わっていなかったことをさしているようにもうけとれるが、この論稿自体、地図の社会化という新しい研究方向の一端を主張しているのである。第5章(三木論文)について

は、「もともと関連の深いはずの社会経済史と歴史地理学の遭遇は、京都の歴史地理学者たちよりも、飯塚浩二氏に代表されるような東京の地理学者であったことは、歴史の皮肉であろう。」という指摘をしているが、菊地利夫氏<sup>1)</sup>をはじめとする関東での歴史地理学が地道に積み上げてきた伝統(現筑波大学系統)が全く考慮に入っていない。この系譜からは近世・近代期の歴史地理学(社会経済事象に関する研究)を推進している後継者が数多く輩出している。

第6章(成田論文)については、編者によってショッキングな章という位置づけがなされ、「歴史学における都市史研究の1980年前後からの勃興をひとつの契機にしていた。」という評価がなされるが、他方、矢守一彦氏以降の進展が見られないことを痛感し、都市空間研究の力が地理学では城下町などの都市研究の中で行われてきた経緯があること、矢守氏の研究は、その後、十分に展開されてこなかったことによると指摘する。もっとも関西で言う歴史地理学的アプローチは、関東においては村落史研究の中にも根付いていることにも注目してほしかった<sup>2)</sup>。第7章(西部論文)は前章を受けた形の地理学者からの都市史研究への参入と位置づけている。現代の人文地理学の研究動向を反映した研究が進展していることと、近現代期に入るとそれだけの史資料が存在していることにもよる。近代以前の研究では、社会事象の考察に入るには史料的に困難性がともなったのである。同様に第8章(加藤論文)も同じスタンスに位置づけられるという。いずれも文学作品を丹念に読み込んだ分析といえる。編者水内氏はこれら後半の若手の論稿を、ニューウェーブの(歴史)地理学と積極的に位置づけた。

本書の構成は

はしがき	水内俊雄
第1章 古代空間の地理的イメージ	千田 稔
第2章 「条里制」研究から何が見えるか — 景観史構築への道程 —	金田章裕
第3章 近世社会と空間	溝口常俊
第4章 古地図・絵図の世界	三好唯義
第5章 社会経済史研究と地理学	三木理史
第6章 空間論と歴史研究	成田龍一
第7章 近代都市と空間 — 地理学批判としての	

近代上海の歴史地理 西部 均  
第8章 近代都市と空間 — 横溝正史の描く神戸  
のインナーシティ 加藤政洋  
文献紹介 水内俊雄  
索引  
となっている。

では、内容に関して見ていくことにしたい。

第1章 「古代空間の地理的イメージ」(千田稔)では、古代日本人と関連する世界・宇宙イメージについて列挙している。「天地」については、「天」と「海」が同じ音で呼ばれたことは、古くは日本列島において「天」と「海」は空間的に区別されなかった文化があったことを想像させるとし、もしこのような想像に随うならば、天は海をも含みドーム状に地を覆うような宇宙観が人びとの想念のなかにあったことも考えられるとしている。「八方位世界観」でも、古代の日本列島の住民にとっての世界(宇宙)観を具体的な形として表現しているものに、中国から舶載された鏡の文様があったとし、古墳から出土する漢代の「方格規矩四神鏡」についての説を紹介している。大地は正方形をなし、その文様の東西南北四方の果てには柱が立って梁(極)がのり、これが天を支えている。「四神と三山」では、四神は宇宙の四方位に守護の役割をもつ靈獣を配するもので、起源としては天空の星宿(星座)に求めることができ、四方位と中心とで構成される五行思想がその基本にある。そして「四禽図に叶う」とは、平城の地の四方に四神に対応する地形があるということであり、この思想を実際の平城京について推定している。ここでは道教の思想をテキストにして解釈する方法論をとっており、とくに都市(宮都)プランの場合、三神山を象徴する場所に宮都をつくることは、宮都を神仙の住む場所になぞらえることであり、宮都の中心に座する天皇が天空にあって宇宙をつかさどる最高神を具現するならば、宮都は天空世界を地上に模したものにほかならず、同時に神仙の住む空間に見立てられることにもなったという。計画都市である宮都プランのようなスケールでは、思想が反映し、思想の地表への現れともいえる。「仏教的世界観」でも仏教は国家宗教として位置づけられたので思想的な定着度は高い。宇宙観を典型的に示している

のは須弥山である。当時の辺境の民をもてなす宴席のような場所に須弥山がつけられたことを示しており、石造の須弥山像がかつて明日香村石神遺跡で出土した。「蓮華蔵世界」では、蓮弁の線の中に九山八海四洲などを描出した須弥山世界の図柄を表現している。そして『続日本紀』には「仏法東伝してより齋会の儀、いまだ嘗て此くの如く盛んなるはあらざるなり」と仏法東伝以来最大の法会を誇っているのは東アジア世界を意識しているとよみとれ、蓮華蔵世界とは聖武天皇にとって国土よりも東アジア世界に重点をおいて認識されていたのではないかと思われると推定している。

上記の理解をうけて、「国土空間のイメージ」については国土創成、天下と国家、そして中華イメージについて語られる。「国土創成」については、国土の存在を超越的に語るのは神話的世界である。『古事記』の国土創成神話からは、神話の語り手が海洋民つまり海人であったことによると思われる。もしそのような説明に従うならば王権の国土空間のイメージは海に浮かぶ島々であったとすると、大八島(大八洲)という国土空間のイメージは長く古代王権のなかで踏襲され、淀川・大和川の河口部に形成される島状の砂州からなる地形が、国土の始原的なイメージとして王権伝承は語りつがれたのであろう。神話古事記の語り手が海洋民であり、そこから大八島イメージという国土空間になることが推定されている。

「天下と国家」については、「地」の部分は「天下」にほかならず、「天」は、天皇の住まう宮とそれをとりかこむ都、そしてその周囲の地理的空間を指していると解される。「中華イメージ」では倭国にも天子がいるということは、倭国も中華思想をとなえるものであって東アジア世界の中国を中心とする冊封体制を否定することになる。倭国そして日本の中華的国土への憧憬はずでにみたくように奈良時代の東大寺大仏造立へと受け継がれていく。それはさらに第二次世界大戦における「八紘一宇」(太平洋戦争期に用いられた大東亜共栄圏建設の理念を示す用語。『日本書紀』神武天皇即位前紀の言葉から造語され、世界を一つの家となすという意味)、「大東亜共栄圏」(日本のアジア支配を正当化するためのスローガン)という国土空間のイメージを描いていく。最後にこのように空間のイメージ像が使命感なき人間の野望に

よって拡大されていく危険な状況は現在もあるが、それを嗅ぎ取る直観力は衰弱化していると語る。東アジアの地政学的状況を背景にした深みのある地理思想が、一見軽いタッチの論稿に仕立てられている。

第2章は「[条里制]研究から何が見えるか—景観史構築への道程—」(金田章裕)である。「条里制」の研究史をたどりながら、歴史地理学の視角と方法の展開の一例を描出し、歴史地理学的事象の研究の典型例を示している。「条里制」の理解と誤解では、「条里制」とは、(A)条里地割、(B)条里呼称法、(C)班田収受法との密接な関連の3要素からなる土地制度として理解されてきており、(A)(B)の条里地割と条里呼称法の2要素からなるシステムを指すのが、「条里プラン」の語であるという。そして条里プランは、律令時代のみならず、中世末まで現実に必要とされ、使用されていたという事実と、時を経て、また個別の実態への理解不足が、誤解へと結びつく場合があった。

また条里地割の最も基本的な属性は、一町方格の坪の区画であると考えべきことも判明した。そして条里地割の規格・規模・施工基準については、研究の進展と精緻化の結果、その実態の多様性も析出されることとなった。条里プランの起源と特性については、条里呼称法は日本において展開した固有の土地管理システムであったことも明確となった。そして土地表示法の変遷では、最古の古代荘園図からは小字地名的名称が付けられており、条里呼称法が定着したとみられる平安時代前・中期には、条里呼称のみでの土地表示が一般的となる。最終的には太閤検地を経て「村・字」の表記へと変わり、この「字」が、明治の町村合併を経て小字に、村が大字になるのが趨勢である。以上のように、条里プランは、8世紀の日本における土地管理行政の必要に応じて成立したものであり、校班田図における土地の標記の基本となったことが明らかとなった。墾田の制度の導入が条里プラン編成の最大の契機となったものとみられる。条里プランの機能とその変遷では、条里プランの坪の区画は、律令の条里プランの時期以上に土地管理および権益や負担の単位として強く機能し、国司ないし国衙の土地管理機構あるいはそれに準じた土地管理様式が存続した期間を通じ

て、この機能が持続した場合が多かった(国図の条里プランの時代)。しかし、荘園の条里プランとなると、やがて土地表示システムとしては全く使用されなくなった。特に「村・字」を単位とする土地表示様式を採用した太閤検地が、その止めとなった。

条里プランは、また固定的で変化の乏しいものという理解が一般的であったが、条里プランの機能自体が大きく変遷し、また農業・土地利用の様相も大きく変化したことが明らかにされている。そこで条里地割内部の土地利用と条里地割の重層性についても、8・9世紀ごろの開拓はこの基本微地形に規定され、さらに耕作・作物栽培レベルでは、水田の水がかりの状況など微細微地形のレベルにも規定されていた。この状況は基本的には中・近世に至るまで継続するが、さまざまな形でこれを克服する努力が続けられ、土地利用は次第に集約化した。微細微地形への工学的対応による土地利用の集約化は、皿池の築造や島畑の形成のような形で一つの極相となるが、これらは地割形態の変遷、条里地割の重層性とも深く関わっている。その結果、条里地割は垂直的にも水平的にもきわめて多様な重層性を生み出してきた。地表に条里地割が広く展開するような景観の出現は12世紀ごろからであった地域が多いのではないかというのが現在の認識であるという。

上記の事実を確認した上で研究方法として「景観史視角」の必要性を提唱している。ダービーのいう「薄い」クロスセクションとその間を結びつける説明的記述ではなくして、第3の方法である。それは個々の景観要素が、どの時期にどのような状況であったのかを、可能な限り厳密に復原し、それがどのような機能を果たし、どのような変遷をたどったのかといった歴史的な生態ないしベクトルを探ることが重要な作業過程となる。個々の景観要素を追跡することによって発生する景観把握の個別性ないし分裂的性格については、個々の景観要素を規定ないし相互規定している状況进行分析・統合することによって、一定程度の克服が可能となる。この視角を文脈的視角(CONTEXTUAL APPROACH)と呼び、これは個々の景観要素について、同時代の政治的・社会的・文化的・自然的諸現象との関連、ならびに他の景観要素との関連を十分に視野に入れることを意味する。一言

でいうと、景観要素の精緻な分析・復原を基礎とした、景観変遷への文脈的接近とでも表現することができよう。これが金田氏の長年の研究成果—「条里制」から「条里プラン」への研究の展開における一つの方法論的帰結である。研究対象として景観（要素）をよりどころにしているが、単なる形態論でないことは確かであろう。

第3章は「近世社会と空間」（溝口常俊）である。プリンスの歴史地理学の方法論である—real, imagined, abstract worldを紹介している。それは過去であれ、現在であれ歴史上の一断面、一地域を切り取り、そこでの現実の世界、イメージされた世界、抽象的世界を描くことである。その上で、3者がいかに変化し（変遷史的地域論）、3者それぞれが地域のスケールを変えていかに展開していったか（階層的な地域論）、そして3つの世界が相互にいかに関係していたかどうかを問うこと（関係史的な地域論）であると主張する。

具体的には尾張一国を対象にして、史料には近世地誌『寛文村々覚書』（1672）と『尾張徇行記』（1822）を中心にして900近くの近世村落のデータベースづくりと、地図化のための村境入りのベースマップづくりを行なっている。現実の世界とその解釈では、田畑の分布、世帯員数の変化、生産と流通（野菜・食料関係）、そして神社の分布についての考察が紹介されている。デルタ地帯での島畑景観の存在、近世後期の核家族化の進行、そして距離の因子によるチューネン圏の存在などが確認されている。次に、イメージされた世界が検討される。距離感と村落評価である。近世地誌には著者の評価が反映していることがある。最後に抽象的世界として中心地名古屋城下町から周辺に移動するにしたがって地域が変容していく姿を人口と土地生産性などを指標として検討している。このようにプリンスの3つの世界を「尾張」という地域で「地誌」を地図化することによって実証してみせている。

第4章は「古地図・絵図の世界」（三好唯義）である。江戸時代の地図文化の一端、つまりその「社会化」（一般大衆へ広く普及・浸透するという意味）の研究である<sup>3)</sup>。江戸時代になると慶長期より地図の印刷が見られ、元禄期を経てその種類や量が多くなり、江戸後期には多種多様な地図が

大量に印刷流布するようになる。いったん出来上がった地図は不特定多数の人びとに対して情報や知識を与える、つまり影響をおよぼすという役割をもつ。この意味で地図が刊行され大量に流布する時代は、手書き図だけの時代よりも社会的に看過できない重要性をもつ。出版元としては、18世紀中頃の宝暦期頃より江戸の版元が力をもつようになり、寛政期を経て19世紀においては江戸での出版が主流を占める。最大の出版をみた分野といえば、それは間違いなく江戸図である。これに続くものとしては、京都図や日本図が200種を超え、大坂図や世界図が100種を超える。数多く出版をみるということは、それだけ要求が多かったと考えられる。例えば、その地に出入りする人びと（武士や商人など）の数が多く、案内図として、または土産品として求められたのだと思われる。とくに江戸図は、他分野の地図にない特色として「切絵図」という、地域別の詳細な分割図の存在があげられる。その説明によれば、武家屋敷を探し求めて道に迷う人が多いので、その道案内のために作成したとある。地図に当時の一般大衆が求めていたものは、図形の正確さではなく、その中身の情報であったことがわかる。このように江戸時代に刊行された地図をみると、地形や方位の確かさを追求していくことよりも、その中身の情報を充実させる方に主眼がおかれていたこと、人びとの需要に応じて刊行されていたことがわかる。さらに地図を楽しむ心では、地図皿、判じ絵について記され、世界地図における日本の表現については、伊能・間宮の調査結果を取り入れ、島として描かれた樺太（サハリン）を載せた「新訂万国全図」（幕府天文方、1810年）は、当時世界最高水準の世界地図となっていることなどの概説的な説明がなされている。

第5章「社会経済史研究と地理学」（三木理史）では、日本の（歴史）地理学と社会経済史的研究の系譜をたどり、社会経済史との接点は稀薄であったことが指摘され、とくに近世・近代の社会経済史的研究は少数派にとどまっていたとする。

近年の歴史地理学でも社会経済史研究との関わりは近世～現代が中心となりつつある。また近・現代間の移行過程を両大戦間期（以下、戦間期）として括することも多くなっている。この第二次世界大戦以前の体制が現代社会を強く規定している

こと、そして近・現代の連続性が重要視されてきていることを踏まえれば、これまで歴史地理学で近代の通過点と見なしてきた戦間期の画期性に注目した課題の設定が求められてきているという提案である。

また産業史研究が生産外部門へと拡大した1980年代以後は、経済地理学との接点も回避気味となっており、戦間期以後の都市に関する考察では消費・流通に目を向けた課題の設定が必要となる。

ここでは戦間期と「都市交通」の成立を中心に述べられている。「都市交通」では都市内交通と郊外交通とを空間的に統合してとらえ、同時にそこに都市物流を含めて考察しており、戦間期に進行した郊外の成長は、その一部に行政域を拡大して併合する必要を生じさせ、都市的領域性が動揺することになった結果、郊外を含む都市圏調整へと移行する契機となったという。大量旅客の出現—「通い」の再生産構造について、現代の都市生活において代表的社会習慣の一つとなっている日常的な交通機関を利用した日帰り地域間往復移動全般を「通い」と表現し、その「通い」の成立では、それ自体の出現とあわせて量的拡大のメカニズムの解明が重要な課題となっているという。日本の「通い」は鉄道開通とともに始まり、創業期の主な鉄道利用者は政府要人やお雇い外国人であり、19世紀末に「通い」が一般旅客に拡大し、その成立過程では1900年代の中学校数の増加により通学が通勤に先行したことを示している。

また賃労働の出現と通勤では、「通い」が可能であったのは、通勤給料制を採用した店員、工場の職員、官吏などの俸給生活者であった。学校制度と通学でも、子弟に中等教育を施したのは、主に専門学校や帝国大学を卒業した俸給生活者で、中等教育を修了した子弟もまた高等教育機関を経て同様の途をたどった。「通い」の再生産構造は1900年代の中学校増設時の中学生が俸給生活者として安定した地位に就くのがほぼ戦間期と考えれば、通学の増加と通勤の量的拡大を担った世代はおおむね共通していたことになる。

次に、大量輸送への対応—都市的領域の拡大と輸送技術—では、私鉄や国鉄における技術対応や、それまで異質な交通機関であった国鉄と私鉄や、法規的に異なる鉄道と軌道が技術的に融合

して平準化し、都市域に均質な大量輸送機関を生み出した。こうして大量貨物の出現—生鮮食品輸送の増加と中央卸売市場の成立—の考察がされる。卸売市場は、明治—大正期に依然近世的要素が持続し、それらに画期的変化の生じたのが戦間期であった。こうしていずれの分析からも、1910～20年代、すなわち戦間期を画期として、現代的な「都市交通」の原型が形成されたことを示している。市区改正条例から都市計画法への移行はその証左であり、これまでの歴史地理学では、それを幕末維新期や第二次世界大戦終戦期をおのおの起・終点とし、戦間期のような括りはせずに、近代の通過点と見なしてきたし、むしろ無視さえしてきた。戦間期のような過渡期に括りを見いだすことで、新たな論点を付与する業績が多数出現しているという主張である。歴史地理学の研究対象が、社会や文化に関わる空間であることを踏まえれば、政治史的な時期区分からの解放が新たな視点や論点を生み出す可能性は高く、新たな論点の醸成や視角の拡大に発展させ、それを隣接分野に発信していくことが、今後ますます重要になってくるように思われると結んでいる。

戦後たぶんにタブー視された戦間期の研究は、とりわけ都市空間においては意味のある一期間として研究されるべきであるという主張には評者も同意するが、「戦間期」という括り自体、何かしら政治史的な区分にも思われる。

第6章は「空間論と歴史研究」(成田龍一)である。歴史学の世界において、1980年代半ばには、都市=空間への視点が提起されたことをうけて、近代日本を対象とした空間の歴史的考察の系譜と現状を概観する作業を行っている。歴史学の地域研究を空間研究とする前提に立ってみると、郷土—地方—地域が歴史学における空間認識の変遷と言え近世史研究では、地域は行政単位であったが、1970年代ころから、地域の主体性と主人公としての民衆がかたちづくる空間として把握され、他の空間(=地域)との関連を積極的に考え、「中央」を相対化する空間概念として位置づけられたと述べる。

ここでは「われわれ」のアイデンティティを核とし、家族—地域—国家—世界の同心円の空間が想定されている。歴史学において「地域」空間は、固定的・地理的範囲ではなく(ここでは自

然的地域の概念をとり上げて、「固定的・地理的範囲」と見なしているのであろう）、主体的に決定する＝選ぶとる空間として伸び縮みし、多重多層の空間として想定されている。空間論の観点からその議論を整理してみると、「地域」空間は、「固定された概念」や実在ではなく、「社会文化の自己認識と自己主張」から導き出される空間であり、「広狭さまざなレベル」において抽出しうるものとなり、「きわめて包括的かつ多様であり、同時に一つのまとまり、統一性をもったもの」として「追及」されることになるという。ここまでくると、歴史学の地域（空間）概念も、人文地理学における実質地域（機能地域）概念という考え方も類似性をもつように思われる。

具体例として、帝国と「故郷」の空間では帝国と移動を「故郷」を介在させて考察している。「故郷」の空間は都市空間の混交性の自覚化の過程でもあり、同時に帝国—植民地の関係が顕在化する空間でもあったという。例えば二重の排除をうけたサハリン在日朝鮮人（李振成）では、「家族」—「一族」—「同胞」をくるむ概念として「故郷」が設定され、あらかじめ存在する「故郷」ではなく、出来事に関わる広がりの中で「故郷」が把握される。香月泰男でも、懐かしさやノスタルジーから、故郷の概念を切断している帝国の空間としての故郷である。このように歴史学の対象とする空間認識は、瞬時にかたちをかえる都市空間をいかに把握するかという営みであるという。そして歴史認識と空間認識は連動しており、空間論は分析と記述の双方が対象とされる必要がある。空間の考察はさらなる認識とそれに基づく展開が要請されている。こうした連関に敏感な研究者たちは、「空間」の問題系を、「場所」論として分節化し、新たな問題化を行っているとして社会学の領域からの問題提起であるが、歴史学もこうした問題を共有していくことが求められているという。ここまでくると、いよいよ現代人文地理学の潮流の一つ、人文主義地理学の空間概念（主観的な空間概念）とも近似してくる。

第7章「近代都市と空間—地理学批判としての近代上海の歴史地理」（西部 均）では、地理学における近代上海研究の不振を克服し、新たな近代上海の地理学を構築するために他分野の学問に学ぶ必要があるとして、横光利一の小説『上

海』の分析を整理し、歴史地理学を構制・展開するための指針を示すことが目的とされている。近代上海のなかで肥大化していった様子を、現地上海にあって日本人は何を体験していたのかを、小説から読み取る作業を行っている。在留日本人社会の形成では知識人たちは上海歴史地理研究会を結成し、貴重な研究成果を残しているが、上海史研究は、戦後のわずかな歴史地理学研究に限られている。ここに、歴史学や文芸作品の性質と比較される（歴史）地理学そのものの問題があると考えられる。つまり時間の流れをぶつ切りにしながらそれぞれの時代の歴史地理を復元するという静態的な研究スタイルをとる限り、事態は変わらないだろうと研究状況を批判する。

小説『上海』は、近代上海に独特の歴史—地理、時間—空間が世界史や国際政治のダイナミズムのなかでもつ特異な意味や働きをはっきり捉え伝える視座を備えていたはずであるとし、この小説から近代上海の時間—空間の生々しいイメージを再構成することができるという。横光が本来描き出そうとした1920年代上海の歴史—地理がもつ世界的・地政学的に重大な意義について立論するために、横光研究者の言説をとりあげて、近代上海はさまざまな国籍・民族に属する人びとが協力して生活を支え合うことなくそれぞれの〈場〉に棲み分けるモザイク都市になった点や、上海に集う中国人の生活を支えていた〈場〉は、商業・文化・慈善活動を活発に展開して上海の都市機能を維持し続けてきた同郷組織であること。彼らは上海にあって出身地の同郷組織に所属し活動することに深いアイデンティティを感じ、在留外国人と同様に、中国人社会も出身地ごとに分かれたモザイク都市を構成し、日本という外敵と戦う上海市民として結束し、上海人アイデンティティを獲得したという指摘をしている。そういう意味でも、この小説「上海」は濃縮した形で近代日本人のアイデンティティの葛藤を切り出すことに成功したのだと、位置づけることができるという。

ここで横光利一研究から近代上海の歴史地理学に向けて、以下の参照点を見いだせるという。①安定した空間パターンの世界に目の向きすぎている地理学が時間—空間のダイナミックな流動に社会の機微を読み取る豊かな感性を備えもつため

には、資料となる各種上海表象から、当時の人びとに共有されていた近代上海の認識空間を丁寧に織りに復元することである。それが近代上海の建造環境・物的環境の現実へと迫るための第一歩である。②第二の参照点は、そうした社会的諸関係の基点として近代上海を享受し活動する人びとの〈場〉と身体への着目である。時間地理学では社会的領域が軽視されがちであり、構造化理論を呼び起こし地域社会史への発展がみられたことを改めて確認すべきである、と提案している。

こうした文学研究の分析力を地理学研究にも転用するために、ここでは行為主体の実践と近代上海の歴史 — 地理とをつなぐ三重の時間 — 空間スケール、すなわち、歴史 — 地理、物語 — 場所、間 — 場を設定する。さらに文学理論や心理学における物語論や各種の社会構築主義的議論と共鳴し、さまざまな利害関心のもとで生きられた時間 — 空間の種別性に、社会的権威や構想力を問う問題構制と結びつくことを主張する。差し当たり、ここで主張する問題提起に終わることなく動態的なアプローチを説得力ある形で実証してみせる努力が必要に思われる。

第8章は「近代都市と空間 — 横溝正史の描く神戸のインナーシティ」（加藤政洋）である。近代期の都市内部の景観を復元、つまり横溝正史の自伝的な随筆を手がかりにして、神戸市東川崎町の風景を言説の上で再現することにある。筆者はここでは就業機会の集積した空間 — 都心（神戸の場合は港湾を含む）と大規模工場 — を取り囲むように凝集した住宅地区へと問いの焦点を移し、労働者の社会空間として物的に現前する雇用関係・分業といった文化経済的な側面を明らかにするために、小説を一つの手がかりとして分析に入っている。社会空間（1） — 工場労働者の街 — では、川崎造船所の門前町が、姿として工場の周囲に寄宿舎・社宅が建ち並ぶきわめて近代的な工業地の景観を形づくっていた。住宅兼店舗でも職工相手の商売を含めて東川崎町は川崎造船所に強く依存していたことがうかがわれる。次に社会空間（2） — 港湾労働者の街 — が考察され、港湾運輸における労働では業務を下請けする多数の零細な運輸業者との間に強固な元請 — 下請関係が確立されていた。港湾運輸業者は船舶運行上の quick dispatch（入港した船舶の速発）を実現しよ

うとしてきたのであった。その根幹をなすのがここで「部屋人足」と称された労働者を雇用する組 = 親方制度であった。「組 = 親方制度」でもこの雇用形態を「組制度」ないし「親方制度」と呼び、それは居住空間の地理を規定する要因ともなっている。こうして近代都市の労働者街、「遷移地帯」としての東川崎町は工業・港湾都市における労働者の街であることが明らかになると、次に、あらためてこの地区を都市内部の空間構造に位置づけられてみたい誘惑に駆られるとして、「川崎造船所の占めるウェイトがあまりに大きい」ことを考えれば、労働者住宅地帯としての性格も少なからずあるものの、そこが脱出すべき地域であるという点で、東川崎町は遷移地帯としての特徴を示している。

土地利用調製とインナーシティの生産では幕末まで海陸交通の要衝だった兵庫津を避けるかたちで居留地を新設したことに始まる。明治期を通じて居留地とその周辺が都市中心となっていた。そして雑居地には居留地の内部に土地を取得することのできなかった欧米系の外国人が海岸側に事務所兼住宅を建設、非条約国の華商も集まり南京町を形成した。この両地区が中心業務地区として近代神戸の都心を構成する。そして空白地帯の湊東地区は、福原遊郭の開設、引込み線の大規模開発、湊川神社造営、新市街の開発、公的・政治的色合いの濃い開発が相次いで進められた。工場は明らかに兵庫側へ集積しつつあることがうかがわれる。兵庫の旧市街地における脱商業化とその周辺で進行する工業化に攻囲される住宅地区となったのである。新しい都市中心における商業の興隆、旧市街地の工業化というパラレルな空間形式のはざまに、まさに両者のせめぎあう社会空間として東川崎町は形成されたのである。読者としては、都市内部の景観の復元を目ざすとすれば、こうした動態のプロセスを地図化（地図化行為に抵抗を感じているのかもしれないが）してくれると、より分かりやすくなり、説得力も増すと思われる<sup>4)</sup>。

最後に編者水内氏による「文献紹介 より詳しく学ぶために」がついている。ここでは歴史地理学のニューウェーブにあたる格好の論考を、第7章、第8章に掲載したという。その代表例として、まず『モダニティの歴史地理』は、アングロ

フォン地理学の、文化地理や社会地理とほとんど融合してしまった歴史地理の新しい流れを知らせてくれ、さらに第6章の著者、成田龍一氏が編著となって著された『都市と民衆』は、社会—空間弁証法的な考えを養う文献としていまなお啓発される書であるという。このほかにも江波戸 昭氏による『東京の地域研究』、『地域構造の史的分析』のような地域史の量産されることが、歴史地理学界にも望まれると主張する。ここまでの文献は編者らの視点に近い文献として紹介されているが、他方、正統派歴史地理学として、一般の歴史地理学で役立つマニュアルとして、『歴史地理調査ハンドブック』（評者からすれば、決して概説書ではないが）と、より表象にこだわった当時としては革新的であったと思われる『絵図のコスモロジー』は、その後の若手の前近代歴史地理学研究に影響を確実に与えた書であったと、一定の評価が下されている。古代、中世となると、手ごわい分野になりつつあるという現状認識がなされている。最後に、京都の歴史地理学派とは一線を画した独特の境地を切り開き、地理学者としてはまれにみる多くの読者を獲得するに至った千田稔氏の一連の著作は、手法を学ぶというよりは、その感性にも近い技で大局を指し示す地平を理解すべきものであろうと結んでいる。

次に、評者にとって興味のもたれる章について、重点的にコメントを加えてみたい。第1章は関連する文献<sup>5)</sup>で、古代王権と空間の関係という視点から、詳細な研究を展開している。千田氏は従来の研究が「景観復原に傾斜しつつあったことは否めない」という指摘をした上で、「歴史研究に対して空間論の展開を主導すべき立場にあった」とか、「……空間への認識を意識的に歴史地理学の研究の基盤として構築し……」という立場から考察したものであったことと、とくに「古代空間の象徴論」では、古代王権の成立には宗教的な基盤があり、可視的な面にも象徴的な景観が作られていくことを指摘する。そして「歴史地理学で王権の問題を受け止めるには、王権にとっての空間は、国際的關係、国家領域そして宮都という中枢的機能と緊密な關係体を形成するものであるという点を最低限度ふまねばならない」という。古代においても東アジアの地政学的状況をふ

まえての考察方法は、ニューウェーブの歴史地理学と関係しないわけではない。「歴史地理学研究は、従来の景観復原的手法を独自のものとして駆使しながらも、その視点は大きく転換すべきことを筆者は問題提起して、すでに二十余年の年月がすぎた」と述懐している。ここでは他分野からの外圧ではなく、あくまで正統派歴史地理学内での変革の必要性が叫ばれて久しいことを、苦悩（苛立ちか）をこめて表明しているとも受け取れないだろうか。

第2章は、編者水内氏のいう正統派歴史地理学の代表者金田氏の論稿である。関連文献の『古代景観史の探求—宮都・国府・地割—』<sup>6)</sup>の第1章「日本古代景観史への視角」にその方法論が詳述されている。その中で、古代日本の景観研究と歴史地理学では、歴史学、地理学の両分野から設定されてきた「歴史地理学」は、前者では地理学的視角ないしは空間現象の分析視角を取り込んだ歴史学であって、後者は過去の地理学であったという。ここでは地理学の一分野としての歴史地理学について述べられている。1930年代の転機として、地名の現地比定から地理的事象の形態ないし景観の復原が主目的となる。そして復原の精緻化には史料集の刊行、大縮尺図・空中写真の利用可能性や考古学の発掘資料の急増も加わっている。そして、自然環境の復原では地形環境に対する「工学的対応」、「農学的対応」、「社会的対応」がみられ、変遷とパターンでは景観変遷史法の問題や村落景観のパターンのみならず、地表にかつて展開した事象そのもののプロセスの解明へと研究は展開していった。形態と構造ではモデルの有効性や問題点が議論され、表現と認識では古代荘園図の表現の分析が行なわれる。機能と生態では条里プランの機能とその変遷や景観生態学と景観の歴史的生態の重要性が強調されている。こうして古代景観研究の現状を認識した上で、従来の歴史地理学の方法論とされてきた「景観変遷史法」では、同時代における景観要素の実態や機能、認識を全く考慮しないままに、それらの存在を前提とした説明を付す危険性が高い。また「厚みのある時の断面」（あいまいな事実認識と動態性の欠如という短所をもつ）と「薄いクロスセクション」（不十分な事実認識となる可能性という短所をもつ）を基礎としても、それぞれ問題点を内包して

いるので、両者の排除のために、第三の方法、「景観史の視角」を提唱する。ここには景観を対象とする歴史地理学の一つの到達点が表示されている。評者の勝手な要望ではあるが、よりわかりやすい形に組み替えていただいで、その方法論を中心とした著作を出版していただければ、景観史の視角なるものが、歴史地理学の遺産として後世に広く普及していくと思われる。

第3章は、『歴史地理調査ハンドブック』<sup>7)</sup>の全体構成を参照していただければ、その方法論の詳細を理解することができる。プリンスの3つの研究方向を説明したあとで、「尾張」という地域で「地誌」を地図化することによって議論するというわかりやすい分析方法を実践してみせている。そして実在の世界を厳密に検討することによっても、われわれが陥りやすい、一見、科学的思考を経たと思われる常識を打ち破ることも可能であることを示している。関連文献としては名古屋市総務局『江戸期なごやアトラス — 絵図・分布図からの発想 —』<sup>8)</sup>がある。また1995年度(人文地理学会)大会特別発表「近世尾張の地域構造」<sup>9)</sup>などでは、近世地誌には動態分析に必要なフローのデータが少ないことや、地域構造分析にはスキナーの中心—周辺モデルの応用、そして地域認識などについての研究成果がすでに報告されていた。加えて、地域を作り上げていったものは誰であり、いかなる力が働いていたかについても考慮をしている。さらに権力のほかに、代官・商人・庄屋・農民がいかに地域に働きかけ、変化させたかについて考えていくべきことも表明している。こうした事実から推論できることは、編者がいう正統派歴史地理学者の思考の中には、すでに権力面を重要視するニューウェーブ歴史地理学の視点は組み込まれていると考えてよいであろう。いずれにしても本章は、近世の地誌書を計量的に研究する方法も含めて歴史地理学的研究法の全体像の雛形を提示してくれたともいえる。

ここまで見てきたように古代から近世におよぶ、第1～3章までの正統派歴史地理学者の論稿では、各々、数十年間の研究蓄積をふまえた含蓄のある歴史地理学の全体像をうかがい知ることができよう。

次に、第6章から8章については一括して考え

てみたい。第6章を執筆した成田はかつて「空間の歴史学へ」<sup>10)</sup>という題名で報告を行っている。そのときの要旨によれば、歴史学が扱ってきた空間は所与の實在的存在ではなく、人間の意識により把握される空間が扱われることになる。とりわけ近代日本を対象とする研究の中では空間の認識は地域という概念の変遷として現れる。そして近代日本の歴史研究において地域は郷土として認識され、やがて地方、地域という空間把握の道をたどるといふ。また、地域の空間はひとつのストーリーをもつ空間として記述される。ストーリーが空間を創出＝統一し、かかる統一空間が歴史叙述として提供される。まさしくこうした空間概念は、人文地理学における主観的空間を研究する人文主義地理学のアプローチに類似する主張である。

成田はさらに地域の重層的複合的な関係概念にも目をむける。しかし、これらについても、ときあたかも人文地理学界でも「地域論」が華々しく語られ、水津理論<sup>11)</sup>といわれたすぐれた社会地理学的な展開もあったことを、記憶から呼び覚ます必要性を感じるのには評者のみであろうか。その考え方は正統派歴史地理学者(たとえば第2章など)にも受け継がれてはいたが、その全てではなかった。その後の歴史地理学が、この地域論を十分発展させることができなかったという反省は必要であろう。たとえば、成田の『「故郷」という物語』<sup>12)</sup>を概観すると、衛生・教育といった近代期の制度的・形式的地域の実質地域化への進展を実証している研究とも位置づけることができる。これら近代期の強力な形式地域を通して「故郷」が学習されてくることがわかる。ここには人文地理学が本来、課題としてもよいテーマ(形式地域の積極的な研究上の意義づけという)に、歴史学分野がアプローチした研究と位置づけることもできる。しかし、近代の形式地域について、十分な実証が果されているとは思われないので、今なお、人文地理学の立場から再検討されるべきであると考えられる。

ところで、郷土史・地方史・地域史については、決して歴史学の独占物ではなかったはずで、かつては「地歴」という形態で両者が密接に係わり合いをもっていた時期が確かに存在した。そうした中で、成田が空間(あるいは地域)を取り込

む形で歴史学の研究史を編成する行為そのものが政治的なものであるみなすこともできよう。

7章、8章は近代期の都市空間を歴史地理的に考察している。近年、近世や近代期では文学作品を題材とするケースが多くなってきているが、その際の研究方法も精密化していく必要がある。ここで編者水内氏がニューウェーブの歴史地理学として位置づけている『モダニティの歴史地理』の中の第9章「アーバニズムの歴史地理」(リチャード・デニス)<sup>13)</sup>をとり上げて都市歴史地理学の場合を考えてみたい。ここでは都市生活に関する小説から「モダン」アート、客観的に見える地図や社会調査に至るまでの新たな表象形態の中で、空間が社会的、政治的に構築、再構築される様相を検討している。近代都市を「合理主義と多元主義の間」にあるものとして記述し、近代都市の勃興と近代小説との間にも、緊密な関係を認めることができるという。それら近代小説の3つの類型の描写、生態、総観はいずれも地理的な思考と関連が深く、描写は主人公の経験を通じて都市が描き出されるもので、農村からの若者や新しい移民であったりする。生態は都市の小さな一部分を詳細に取り上げた小説で、総観は都市を足下に見下ろすものである。そう考えると近世の小説や地誌の中からは近代都市の勃興を記述した内容は少ないのかもしれない。このように空間をめぐる近代期には人間行動も含めてあらゆる史資料が活用される。そして社会人文科学の分析法も活用される。たとえば、新しい居住空間として「郊外」を歴史地理学的に研究するには1つ目として、国勢調査や不動産の記録、都市住所録などにもとづいて分析する方法で、2つ目は新聞、雑誌、小説にみえる当時の郊外生活の様相を検討することである。また都市を地図化する行為には、社会問題は空間的境界の中に閉じ込めることが可能だとすることが暗に意味される。たとえばスラムは外部の者がその内部の者たちを他者として理解するために作り上げたものであり、古典的な社会的構築物の典型例であるという。都市の居住分化や機能の特化によって、新たな空間、新たなスケール、新たなパターンがそしてネットワーク化した都市をつくるための技術等々の新たな形の技術が創造された。同時に話され、書かれ、可視化され、地図化され、写真や絵画に表現されることを通じ

て、さらに都市の近代化は心の中でも起こっていたのである。

こうして近代都市を研究する歴史地理学者は、用いる資料やアプローチについて折衷的になるべきこと、質的な資料も量的な資料も不可欠であること、あらゆる資料は文学作品であれ統計であれ、社会的に構築された表象であること、さまざまな資料が相互に情報を提供しあっているのであり、それゆえに三角測量的な見方(1つのものごとを複数の視座からとらえること)が必要となるのである。以上の指摘からわかるように、近代都市の歴史地理学的研究では、現代人文地理学と同じ研究方法をとることが可能であることはわかる。加藤が(近代)都市の空間的共通項としての〈花街〉を扱った近著<sup>14)</sup>での方法論は、デニスの主張を実践してみせたとも言える。そして第8章は、その際の反省点として表明された人物のいない風景を克服する一つの事例研究として小説を積極的に活用し、動的アプローチを図ったともとれるのである。確かに事柄の本質への洞察力という面では、芸術家や文学者の直観力の優秀さは了解できるし、とりわけ「生きられた空間」の復元に彼らの著作は大いに期待できそうである。ここまでの主張を見ていくと、ニューウェーブの歴史地理学と、日本における正統派歴史地理学が目指す方向性には、断絶よりはむしろ連続性があるように思えてくる。

最後に、編者水内氏による文献紹介を読みながら感じた諸点を述べてみたい。現代の人文地理学の潮流をみると、研究の視点が経済活動中心から、社会・文化的事象に移ってきたことが、本書の各章の中で指摘されてきている。とくに人文主義地理学、ラディカル地理学(構造的マルクス主義)、そして新しい文化地理学(カルチュラルスタディーズ)とが複雑に絡み合ったりして、一部ではその統合が課題とされてきている<sup>15)</sup>。本書の各論稿を読了してみると、正統派歴史地理学と編者らによって立つクリティカルな歴史地理学との間にどのような断絶ないしは連続性があるかについて考えてみたくなる。1つには「空間」が社会的、政治的に構築、再構築されるという点を強力に打ち出した歴史地理学(マルクス主義的展開)を推進していくことになるのか、それともそれは

また現代人文地理学におけるアプローチのなかの1つの潮流である人文主義的ないし主観的な空間概念を前面に打ち出す地理学的研究を、積極的に推進していくことになるのかなどについての論稿が編者によって提示されていても良かったように思われる。評者からすると、クリティカルな歴史地理学は、歴史学から設定された歴史地理学になりやすいのではないかという印象をもたせる。それは編者たちの立脚点が、元来、歴史主義的な性格が強いと感じられるからでもある。

また評者は、かつて葛川絵図研究会の場で、古地図研究をめぐる日本史研究者と歴史地理学者とが議論を交わしたことを思い起こした。それは古地図（絵図）にベスマップ的なものの存在を想定できるか否かについての議論であった。日本史研究者の主張はあくまで古地図は作者の作成目的から読み取るべきであって（作成目的論）、地図としてのベスマップ的な実在的世界を容認しがたいことを強調した。それは自然的事象の描写内容に対してもそこにストーリー性を強く読み取る傾向が強かったことを思い起こした。しかるに歴史地理学者は古地図にはそうした主観的な認識面のみならず、地図としての客観的な枠組みの存在（実在の世界）を信じているとの主張であった。本書の中でもそうした両側面が新旧の研究者の立場としてみられるが、評者としてはどちらかの主張を退ける立場をとらない。ともに今日の歴史地理学の研究方向に含まれていると考えるからである。それはまた、歴史地理学的思考の枠組みが豊かであってほしいと願うからでもある。伝統的な歴史地理学者はプリンスのいう3つの研究方向をそれぞれ発展させていきたいと望んでいる。今もって研究の中心は第1の現実世界の空間研究を進めている研究者が多いのは確かである。ここでの評者は正統派歴史地理学に立脚しているものの、クリティカルな歴史地理学に対しても魅力を感じていることは認めざるを得ない（かつてそういう時代思潮の中にあつたことによる）。本書はこうした新旧両者の考察方向を味わうことができる新鮮な内容を含んでいる。歴史地理学を志す者のみならず、数多くの人文地理学徒に読んでもらい、議論の輪を広げていただきたい好書でもある。しかし両者の間隙を繋ぐ道筋を付けるにはいま少し時間がかかりそうであるし、そうした行為

は一方が他方を飲み込む形ではなくして、現代の人文地理学と正統派歴史地理学とを連続線上に位置づけることにも寄与することになるのである。

なお編者水内氏の述べる過去の地理学の事例研究の量産には大いに賛成するところである。もともと少人数の歴史地理学者の分散的な活躍だけでなく、かつてのように人文地理学者がこぞって歴史地理学的な論稿を生産していた時期が復活することを願ってやまない。専門分野であると同時に、現代の地理学あるいは人文地理学の基礎・知性の宝庫としての歴史地理学でもあるのだから。

（上原秀明）

### [注]

- 1) 菊地利夫『新田開発 改訂増補』、古今書院、1977、538頁。同『続・新田開発 事例編』、古今書院、1986、760頁。
- 2) 木村 礎『日本村落史』、弘文堂、1978、359頁、ほか多数。木村氏をリーダーとする村落景観研究をさす。
- 3) 三好唯義編『図説 世界古地図コレクション』、河出書房新社、1999、139頁。三好唯義・小野田一幸『図説 日本古地図コレクション』、河出書房新社、2004、127頁。
- 4) 太田 勇・高橋伸夫・山本 茂「日本の工業化段階と工業都市形成（上・下）」、経済地理学年報16-1・2、1970、1～28頁、1～23頁。この論文では、工業化段階と都市形態との関係、地域の総体的把握、そして地域社会の実情を記載して工業都市における生産と消費生活・居住環境などとの関係を分析することが目標とされている。
- 5) 千田 稔『古代日本の王権空間』、吉川弘文館、2004、292頁。
- 6) 金田章裕『古代景観史の探求 — 宮都・国府・地割一』、吉川弘文館、2002、372頁。
- 7) 有蘭正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2001、249頁。
- 8) 名古屋市総務局『新修名古屋史報告書4 江戸期名古屋アトラス — 絵図・分布図からの発想一』、名古屋市、1998、77頁。
- 9) 溝口常俊「近世尾張の地域構造」、人文地理48-1、1996、98～101頁。

- 10) 成田龍一編『近代日本の軌跡9 都市と民衆』, 吉川弘文館, 1993, 293頁。成田龍一「空間の歴史学へ」, 経済地理学年報40-1, 1994, 78頁。
- 11) 水津一朗『新訂 社会地理学の基本問題 — 地域科学への試論 — (増補版)』, 大明堂, 1980, 248頁, ほか。
- 12) 成田龍一『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』, 吉川弘文館, 1998, 259+13頁。
- 13) リチャード・デニス著, 上杉和央訳「第9章 アーバニズムの歴史地理」, 257~292頁 (米家泰作・山村亜希・上杉和央訳 (ブライアン・グレアム, キャサリン・ナッシュ編) 『モダニティの歴史地理 下巻 — 大学の地理学 —』, 古今書院, 2005, 370頁所収)。
- Graham, B. and Nash C., *Modern Historical Geographies*, Person Education Limited, 2000.
- 14) 加藤政洋『花街 異空間の都市史』, 朝日新聞社, 2005, 322+4頁。
- 15) R. J. ジョンストン著, 立岡裕士訳『現代地理学の潮流 — 戦後の米・英人文地理学説史 — (下)』, 地人書房, 1999, 404頁。
- Johnston, R. D., *Geography and Geographers: Anglo-American Human Geography Since 1945*, Arnold, 1997.